

ブリコラージュセミナー

講演

やましさと利己からのケア・介護

和光大学人間関係学部・教員

最首 悟

たくさんお集まりいただいて……。最首と申します。

大学では「ケアゼミ」をやっています。学生のなかには、「私はこれまでケアをしたこともないし、ケアされたことも一度もない」と言う人がいます。すごいですね。その時、「ケア」というのは何をイメージしてるんでしょうね。

私は、食って、寝て、子どもをつくって、暇を見つけて遊ぶというのを「素生活」と言いました。「素」は、素うどんの「素」であり、素人の「素」です。この「食って」も大事、「寝て」も大事、子どももつくらなくちゃどうしようもない。それ抜きには何も始まらないですね。誰かが子ども生んでから、今いろんなことを言ったり何かできるわけですから。



星子が居る

言葉なく語りかける重複障害の娘との20年

著者◇最首 悟

体裁◇四六判・上製・446頁

発行◇世織書房

定価◇3,600円+税

根本は、この30年間の私の「素生活」にあるわけですが、重複障害をもつ娘の星子は今年30歳になります。私もつられて70歳になります。星子は私の第4子です。この星子について書きためたものをまとめたのが『星子が居る』という本です（世織書房刊）。「が」も大事ですし、「居る」も大事です。

水のごときの介助

星子は、体重が40キロ、身長が140センチぐらいです。この星子の世話、介護、ケアが、私にとって一番関心をもち、関係するところです。

「カプカプ」という作業所を立ち上げて、星子はそこに週一回ぐらい通っています。毎日通いますと、「カプカプ」がつぶれてしまいます。「カプカプ」には、横浜市から補助金が年間1,200万円出ますが、人件費と光熱費と家賃でほとんど消えてしまいます。職員は常勤2人ですが、それではとても足りませんから、非常勤職員、アルバイト、ボランティアでもってるんですけど、星子が毎日行くわけにはいきません。その理由の一つが星子はおぶらなければいけないということです。

40キロですからちょっとつらくなってきましたけど、母親も私もおぶります。若い職員がおぶると大体腰痛を起こしてしまいます。原因は、星子

◇最首 悟 (さいしゅ さとる)

1936年生まれ。動物のホルモン研究を志すが、人間学のほうへ傾き、いまは問い問われることがいちばん大事と思っている。水俣病問題にかかわり、「水俣問学」をしている。「最首塾」というホームページがある。和光大学教員。「環境哲学」専攻。

最首塾 <http://www.geocities.jp/saishjuku/>



が職員の背中にぴったりくっつかないからです。ひいき目に見て私がおぶってもまだ何とかなっているのは、星子が私の背中に張りついてくれるからです。もう重さが全然違いますからね。結局、星子のほうが気をつけているのですね。でもさすがにやっぱり腰や膝にこたえてきて、いつまでできるだろうかと思ったりします。

星子は目が見えません。話しません。なかなか歩きません。そして、自分で食べないんです。これがやっぱりどう見てもちょっと外れています。手でものをつかんだらそれを反射的に口に持っていく。そして、それが食べられないものでも食べたりすることから、人はものを食べることを始めるのだらうと思いますが、星子はまず手でものをつかまないので、口に入れてやるわけですが、噛みません。飲み込みます。

歯は永久歯がきちんと生えなかったのと、歯の治療ができないために前歯がなくなってきて今はもう噛むことは難しい状態です。ご飯を食べたくない。無理に食べさせるのはやめてもらいたいということを星子は露骨に表現します。口の中に入れた刻み食を飲み込まない。それで吐くこともしないのです。すごいですよ。ブッなんて吐き出さない。1時間ぐらい口の中にずっと入れています。そこが星子の礼儀、礼節なんでしょう。

一番物議を醸すのが星子を風呂に入れることで

す。母親は当然のごとく、それは父親の役割であると言います。しかし、フェミニストからは「父親が娘を風呂に入れる！ セクハラそのものじゃないですか」と怒られるのです。「じゃ、どうしたらいいのか」と聞くと、「ボランティアに頼めばいいでしょう」と言う。一方、母親は、「冗談じゃないわよ。ボランティアなんてお断わり。父親が子どもを風呂に入れて何が悪いのよ！」と言うし、私はもう立つ瀬がない。

今日の大きなテーマの一つは「やましさ」ですけど、ただ、この風呂に入れることだけは私にはやましさはないんです。ほとんど水のごときの介助というか、何も考えていない。ただ、星子を湯船に沈めておくためにはいろんな手立てが要るのですがね。

星子は強制されると、もうだめなのです。白内障でレンズを2つ取る手術を行いました。本当は1つでよかったのです。片方はすでに網膜剥離を起こしていたので、レンズを取っても意味はなかったのです。それなのに大学病院は2つ取った。なぜかという、片目は若手の医者への練習用だったんですね。

病院では医師も、看護婦さんもすぐ縛ろうとします。縛ったら星子がどれぐらい反抗するか、もう骨が見えるまで暴れるということがわからないのです。だけど、僕たちはそのぐらいの予想はつ

きます。星子の両手を持つ人が2人。そして、その2人の世話をする人が1人ということで3人は必要です。星子が入院していた10日間、延べ250人ぐらいの人が来てくれたという経験があります。

とにかく星子は何か強制されたらだめなのです。お風呂も湯船に沈めようとした途端に抵抗します。結局、湯船に入っている間、私が彼女の手と打ち合わせたりして歌を歌うということになるんですが、そこにまた大きな問題がありまして、私が音痴なので、外に漏れると恥ずかしいから歌うなと母親が言うわけです(笑)。困っちゃうよね。

残酷な世界がある

ボランティアの方とか、あと、子どもにも頼って星子の生活は一応落ち着いています。しかし、家族では済まされないことはもうはっきりしています。でも、できるだけ家族でやりたいし、施設は論

外。以前、これからは葬式など夫婦で出かけなければならないこともあるだろうから、そろそろ考えなくちゃというわけで候補となるところへ連れて行ったことがあります。星子は玄関からもう入ろうとしません。どうしてわかるのかしら？と思うのですが、絶対に入りませんでした。

その延長で、とてもじゃないが施設は無理だろう。できる限り家族で、と思うわけです。そのことも含めて、身もふたもない話だけど「早く死んでくれないかな」と思うんです。母親は毅然として「星子は私より早く死ぬのです」と言います。

さしあたりの結論が、「星子は親よりも先に死にます」という態度。と同時に、「早く死なないかしら」という気持ちはどうしたってあるわけです。そういうところはあんまり隠さないほうがいいと

思うんです。早く死んだほうがいいと思いながら大事に育てるといことはあるわけですから。

1枚、2枚と皮をはいでいくと、相当冷たい、残酷な世界というのは必ずある。それを避けてはいけないのだらうと思います。頭の中にあるのは、やっぱり親子心中です。親子心中のもう一つの場所に子殺しがあります。やっぱり首締めちゃうのがいいのかしらとか、それは消えないですよ。さすがに子殺しはかすんですけれど、親子心中はありますね。

片方で、親はなくても子は育つと思っています。ほったらかしにしたって子どもは育つわけで、むしろ子どもはほったらかしにされたいんじゃないか。その一面を星子は確かにもっています。

基本的に「世話されることはノー」というのが人間だと私は思いたいのです。仕方なく必要があって世話されるのであって、世話されるほうが世話されることを好きなわけ

がないのです。仕方なく、しょうがなく世話されている。星子はウンコもオシッコも生理も人任せです。世話されたくないんだって自分で始末しろと言いたくなる時もあるけれど、でも本人は愉快ではないんでしょうね、きっと。

ひとりになりたい、なりたくない

私は喘息持ちです。結核にも罹りました。加えて、引きこもりだったのか登校拒否だったのか、小学校を卒業するまで9年もかかっているんですよ。何で9年かかったのかわからない(笑)。年から年中、喘息が起こってるわけじゃないですからね。ほったらかしにされていたからだと思うのですが。

吉行淳之介やブルーストなど、世界にはいろんな喘息病みがあって、いろんな逸話があります。問題は酸素量です。部屋に誰か入ってくると酸素を奪われると思って、激しくその人を憎むわけです。「早く出ていけ。おまえが酸素食ったらおれはどうなる」という感じになっちゃう。それでいて片方では、少しでもいいから背中をなでてほしいと思うんです。誰か来てくれないかなと…。

だから、いつもけんかばかりしているすぐ下の弟が来て背中をなでてくれたりしたら、感激しちゃうわけ。そして、一方で憎むんです。「早く出て行け」と。どうしようもないです。なでてほしいし、出て行ってほしい。ここらあたりはケアや介護の原点かもしれませんね。

してほしい、ほったらかしにされたくない、ひとりぼっちになったらどんなに寂しいか、苦しいか。だけど人が来て世話されたり何かされるともう嫌だという、この板ばさみ的な気持ちを、障害をもっている人や病人や老人はみんなもっているのではないのでしょうか。

生まれたのだからしょうがない

これはみなさんの賛同を得られると思うのだけれど、私たちは生まれたくて生まれてきたんじゃないと思っている。私は「生んでくれと言った覚えはない」と母親にギャンギャン言っていました。ある時母親が、一瞬悲しい目をして「生もうと思って生んだんじゃない」と言ったんです。子どもから何か言われたら、「生もうと思って生んだんじゃない。しょうがねえだろ」としか言えないですよ。

そこで「(子どもは)授かりもの」という伝統的な言い方が必要になってくるのでしょうか。「授かりもの」といってありがたがっているわけではありません。授かったのだからしょうがない。いやでも育てなければいけない。「授かりもの」という言い方にはいのちに対する敬意が込められています。

芥川龍之介に『河童』という小説があります。取り上げカッパばあさんが「生まれたいかい？」と聞く。「生まれたくない」と言うと、ピューッと消えて生まれてこない。「生まれたい」と言うと、出てくるんです。僕はそれはある種のあらまほしき誕生だと思っていたのですが、星子が生まれてからこれはまずいなと思うようになりました。「生まれたい」と言って生まれてきたら大変だろうなと思ったのです。

「この世で生きてい」という意思表示をして生まれてきたんだから、そう簡単に人生を投げ出せません。親も子どもも、生まれたんだからしょうがないと思っている時には、責任転嫁ができるんです。僕は、少なくとも生まれた瞬間は完璧な無責任状態だと思っています。

ただ、生まれた次の瞬間からおっぱいをどのぐらい飲むかとか、どれぐらいの間隔で飲むかとか、日常の瞬間、瞬間の自分の好みや欲望のあり方は、遺伝的なものが絡んでいるにしても、全部自分が選んできたことでしょうか。生まれた次の瞬間から積み重ねはどんどん始まっています。けれども、生まれてきたことについては結局、私たちは「独存」状態にあるのです。

いのちはどこから来たか

「独存」というのは、私の造語です。誰の責任でもなくて、誰も責任をもっていない存在を「独存」と言いたいのです。「独存」は、基本的に「首根っこをつかまれていない」のです。「首根っこをつかまれている」というのは、ライオンが子どもの首根っこをガツとつかんで運ぶあの状態のことです。私たちは、首根っこをつかまえていないんじゃないか。

首根っこをつかまえてこの世につれだされてきたという思い、そして、この首根っこに抵抗したいという思い。西欧の近代は、この抵抗でもあるのです。西欧の自然科学の研究者たちは、こ



星子さん 2005年夏大磯にて

の首根っこに反抗するけどもそこから逃れられない。この首根っこ抜きにして西欧は理解できないですね。

アメリカのギャラップという大手の世論調査会社が5年ごとに調査をしています。そのなかに「人間の誕生について神様が直接手を下しましたか？ それとも神様が関与をしていますか？ それともダーウィンの進化論にのっとっているんでしょうか？」という質問があります。答はどうなるとおもいますか？ 「直接手を下した」「関与して」で85%です。この比率が変わらないんです。「ダーウィンの進化論で猿を経て人間が出てきた」が5%。「わからない、答えたくない」が10%です。この調査を日本でやったらどうでしょうか？ 完璧にひっくり返るでしょうね。だからといって、日本列島人が科学的だなんて誰も思わない。不信心という意味でも日本は特別性です。僕は当たり前のように思ってるけれども、非常に特別なんじゃないでしょうか。

「首根っこをつかまれている」に対して「独存」というのは何だかわからない、生まれてきちゃったということです。いのちは神様がつくったんじゃないで、創造されたんじゃないで、湧いて出

てきたのじゃないかというのを「自湧^{じゅう}」といいま
す。これが私の関わる自然科学における生物発生
のキーワードです。生まれてくる、生成してき
ちゃった。

今の段階では、この地球上だけで生物は発生し
たとも言えない。いたるところで発生していいは
ずなんだけど、どうやって発生してくるか。それ
は少なくとも「神の力」という外在的な力ででき
たんじゃない。となると湧いて出てきた、泉が噴
き出すようにいのちは噴き出してくるんじゃない
か。生まれたくて生まれてきたんじゃない。生ま
れてきちゃったんだよというのを「自湧性」を
もった「独存」と言います。これが私たちのこと
なんじゃないでしょうか。

「人間は原子だ」という「入れ子型」

まず「入れ子型」というとらえ方があります。入
れ子というのは、箱など大きいものから小さいも
のへ順次重ねて組み入れたものことです。

人間は生物であり、生物は機械であり、機械は
物理化学原理で成り立っているという具合に、そ
の起源を絞っていくわけです。これが、ユダヤ教、

イスラム教、キリスト教の考え方です。学問的に
いうと還元主義。つまり、人間は起源をたどって
いけば、ついには原子に至るよ。いや、原子もバ
ラバラにされる。最終的に人間はエネルギーだ
ということになる。この考え方が結局は「人権」と
か「尊厳」「特別製の人間」という考え方につな
がってくるのです。

フレッチャーというアメリカの生命倫理の大御
所が17カ条の「人間の条件」を出しました。怖い
ですよ。「IQ20以下は人間と認めない」「昨日と明
日という概念がわからないのは人間と認めない」
……。それを当てはめると、星子は人間じゃない
ことになります。星子は単純そのもので動物と境
目がありません。だけど、自分だってそうです。ク
ソまみれ、オシッコまみれで、生理があって、ア
カが出て、そういう単純極まりないところの考え
方としては、人間が「特別製」だとは思えない。

そして、フレッチャーのこの条件にはオチがつ
いています。人間じゃないのだから、臓器提供体
として見なすことにしようというのです。医学生
の解剖用にしよう。これがネオモートという「新
しい死体」という概念です。「人間じゃない」とい
う条件を設ける。これは「入れ子型」の発想です。

「人間は網の目の一つだ」

もうひとつのとらえ方が「網の目型」です。お
互いの関係が入り乱れて果てがわからないという
ネットワーク関係構造です。そこで私たちは便宜的
にいろいろ切り取って、「あなたと私」とか、「教
人」とか、「数十人」とか、「日本という国」とか、
そういうふう限定を設ける。しかしネットワー
クはつながってる。これは実は仏教的な、道教的
な、老子的な考え方なのです。

私たちは網の目の一つ目。そしてそれはすべ
ての網の目の影響を原理的に受けます。意識はで
きないけれど、私が咳をしただけで、全部に影響
が伝わる。どこかの影響は全部私にかかってくる。

けれども、網の目全体が調和をなしているので、
網の目構造は変化を吸収してバランスを取ろうと
するのです。となると、「独存」というのは、この
網の中に位置している目ということになります。
この「目」については、おまえのほうが偉い目だ
とかそういうことはないのです。網の目として、
みんな同じ役割という平等性をもっています。

「入れ子型」も「網の目」のひとつ

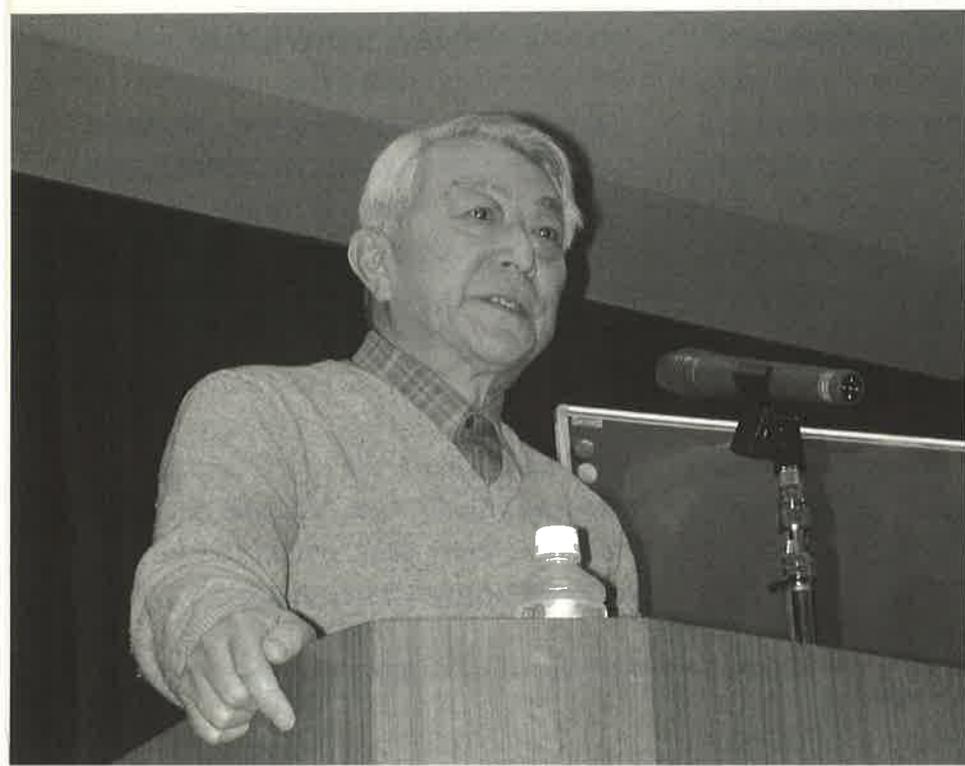
この網の目構造には、首根っこをつかまえてい
るのは誰かということがないのです。つまり、「首
根っこをつかまえられている」というのは、首
根っこをつかまえている何かがいるわけですね。
それが抽象であろうと何であろうと。だから首
根っこをつかまえるほうの存在の規定とか、属性
とかを論じてきました。それが「神学」です。

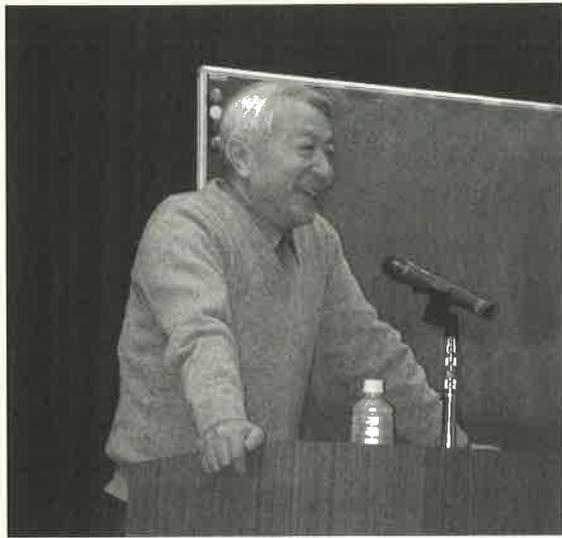
ところが、全部が網の目だとしたら、つかま
えているものはいないんです。じゃ、網の目はどう
して出てきたの？ と言うと、わからない。この
「わからない」が大事になってきます。

大乘仏教で言う「因陀羅珠網」という鏡の網の
目はすごいですね。鏡の中にすべての、無限の網
の目、つまり一つひとつの鏡がみんな映っている
んです。一つの小さい私という鏡をのぞき込むと
全部映っている。また一つをのぞき込むとまた全
部映っているんです。で、またその一つをのぞく
と……。もう気が遠くなります。つまり、「私」と
いう鏡はすべてを映しているというわけです。

関係がすべてであるということ。日本とか、地
球なんていう小さいことじゃない。その中に山川
草木、波頭、みんな入れていいのです。私はひと
りであってひとりではない。今、打ち寄せてくる
波頭とも関係をもってしまっただけで影響されてい
るはずだし、私がこんなこと言った途端に波頭だっ
て影響されたかもしれない……。

だから、ひとりになったらどうやって生きてい
けませんか。だからシカトというイジメが効く





のでしょう。首根っこをつかまえている人にはシカトは効きません。アメリカの陸軍士官学校で4年間だか3年間、ひとりの学生を全員が無視したそうです。だけど、その学生は平然と卒業していった。それは首根っこをつかまえられていれば可能ですね。

今、仮に「入れ子型」と「網の目型」と二つに分けましたが、これは相当な異文化ですね。「入れ子型」は網の目に取り込んでいいと思います。確かに人間は原子からできているということは言えるけれど、しかし、原子をたどっていったら、結局また網の目に戻ってくるでしょう。

もう一つの側面。首根っこをつかまえられていたら自分が何をしたら、責任は首根っこをつかまえているほうにあると考えることができます。ナチスの恐ろしさはそこにあるんです。アイヒマンは、私は平凡な官吏だ、結果として600万人のユダヤ人を殺したかもしれないけど、命令を受けてやっただけだという。命令をたどっていくと神になるんじゃないですか？「網の目型」のほうは、責任取れという、全部に影響するよという言い方になります。確かに私は今この茶碗を割ってしまった。だけど、私は割ろうと思って割ったんじゃないし、やっぱり茶碗は「割れた」というのがいいんじゃないかしら。しかるべくして茶碗は「割れた」のよというとらえ方です。

マイナスをゼロへ

「やましき」というのは「網の目型」にしる、「入れ子型」にしる、人間の人間たるゆえんじゃないかと思います。調子悪い、ヤバイ、これまじいんじゃないかというマイナスの気持ちが人間を今、よくも悪くもこのようにしているという、そのところに立たないと、そして次に「網の目型」のほうに立たないと、ケアというふうには、つまり自然なケア、権力関係にならないケアにはならないんじゃないかと僕は思っています。これは相当大的な問題です。

私の持論は、「やましき」をマイナスととらえ、これをゼロにもっていくように、する、しているということです。ゼロを目指して、すぐにプラスは持ち出さないようにすることなんです。

ボランティアは「プラス」としてとらえられがちです。やむにやまれぬ気持ちでやっていますと言っても、その「やむにやまれぬ気持ち」が尊いとか、プラスだとか言う。善意で「世話してやる」なんていうやつが登場してきたら本当に絞め殺してやりたいと思ってしまいます。

以前シンポジウムで「ボランティアも結局は〈義務〉というようなどころから発してこなければいけないのではないか」と言ったところ、会場の



女子学生が身を震わせて怒りました。「義務」というところに引っかかったのです。「私は盲人のボランティアをやっているけれども義務でやっているんじゃない」というわけですが、つまるところ、ナルシズムの塊なんですね。ナルシズムでボランティアをやられちゃかなわないです。

だからプラスはさておいて、「マイナスからゼロへ」という状態。ゼロという常の態に向かって、今あまりにもマイナスじゃないかというところを直したいんです。

「やましき」からの出発

私なんか「やましき」だらけですけども、なかでも相当残っているのは、戦後すぐのことでしたが、卵がほしくて、プリマスロックのメスオスのひなをツガイでもらったんです。兄弟でニワトリ小屋を建てて、「これから毎日卵食べるよな」と言ったその日に、野良ネコがなんとメスをつかまえて持って行ってしまった。で、弟と「あのネコを殺す」という誓いを立て、殴り殺しました。これは一つのやましきです。ずーっと残っています。

食って寝てという「食って」というところで僕たちは殺して食っているわけです。その殺して食っているところは「やましき」。レタスを食べるも殺している。ましてや牛肉や鶏肉や豚肉となっ

たらねえ。そこで、生き物だから当然だろ、殺して食ってるんだよと言うのでは、人間にはならなかったんじゃないかと思うんです。やましい、しかし、食わなきゃ。食うけどもやましい。そして、おれは生きてくたえ生まれてきたんじゃないんだとなると何なんだということになりますよね。ここが入口です。

宗教による「やましき」からの解放

「やましい」の反対は「やましくない」で、うつむいた顔を上げている状態です。動物はふつうこの状態です。それで、これが正しいかというそれはわからない。正しいというはノーマルで正常といいます。そして正常の反対はアブノーマル、異常で、「やましい」は異常なのかというと、それはちがうと言いたくなります。私たちは動物でありながら動物から離れた特徴として「やましき」という思いをもつにいたったとすれば、「やましい」と思うのは正常なのです。にもかかわらず落ち着かない。

この気持ちを拡大して、そして落ち着くことこの極端も考えるというのが宗教です。やましきや落ち着かないという気持ちを罪にまでもって、罪の払拭、贖罪を通して救済を打ち出し、苦という形にしぼって、苦からの解脱を説き



ます。そうすると、「やましさ」のある種のとりとめなさが絞られ、整理されすぎてしまったような感じがします。

大事なところなので、すこしこだわります。「やましさ」は、生きものを殺して食って生きている、ということに気づいて、そして自分は食われたくない殺されたくないと思っているということにも気づいた結果の思いです。そこから当然ながら、カスミを食っていききたいとか、水と炭酸ガスとお日様で食糧をつくり出す植物になりたいとかの願いが生まれるけれど、さしあたりは動物であることはいかんともしがたい。

人間は動物じゃない、特別製で、動物や植物、生きものは人間の食糧としてつくられたんだから、「やましい」と思うのがおかしいのだ、という考えも発生しますが、それで「やましさ」が消えるかというところでもないです。もって瞑すべしという考えもあります。たとえば、魚は人間に食われて本望なのだから、ちゃんと食べなければいけない、ちゃんと食べれば魚も喜ぶよ、と言います。踊り食いの底にはこの思想があります。「ちゃんと」

という典型が生きながら食ってしまうことで、殺して食うからいけない。じゃあ、私は生きながら食われてよいかというと、ますますごめんです。

いのちにふれる瞬間

「やましさ」はなんとか解消したい、しかし解消した状態をなんと呼ぶかということ、実は困ってしまうのです。「やましさ」は生きているから生じるのであって、そして生きているなかでその解消を図りたいのです。

宗教は粗っぽく言うと、往生の先に問題の解消を求める。安心立命にはどうしても死の匂いがする。今は、いのちあつてのものだね、死んで花実が咲くものか、のところで考えます。宗教をないがしろにするのではありませんが、宗教は「いのち」を根本に据えないところがあります。「いのち」を超えた何かを問題にします。

そうではなくて、「いのち」からすべては発する、そして「いのち」は「自湧」だとします。そして「いのち」をあとう限り拡大します。石や山川草木、波頭まで「いのち」あるいは「いのちの形」なのです。すべては神性や仏性をもっていると思ってもいいですけど、その根本は「いのち」、宇宙も「いのちの形」とします。宗教の教義は分かれています、すべての宗教に共通して魂とともに「いのち」があります。この「いのち」を先頭にかかげることが、宗教対立を解くカギだと思ひ、「いのち」を通すことで、いろいろな宗教のよい点が見えてくるという立場に立ちたいのです。

こう考えると、「やましさ」は「いのちの形」の一つである動物が生きているのに、他の「いのちの形」を崩したり、瓦解させたりしなければならぬことに納得がいけない気持ちなんだろうと思います。しかし、納得するということは「いのちに化す

る」とでも言うほかない状態なのではないか。ところが、「いのち」はすべてであり、ほかに何もなくて、比較できない価値で、そういう価値を無量価値といい、価値フリー（価値を免れている）でもありますから、「いのち」はゼロ価値、ゼロ状態とも言っているのです。マイナス、プラスはみんなこのゼロから発していると思なしてください。ゼロはいわば故郷であり、母であり、大元なのです。ただ、いのちに化す、ゼロに化すといっても、どうしたらそうなるのかわからない。「やましい」というマイナスからゼロへという道筋だけわきまえて、実際にその道筋をどう歩くかを考えねばなりません。

繰り返しになりますが「幸せ」の反対は「不幸せ」かもしれないけれど、「不幸せ」の反対は「幸せ」とはかぎりません。「不幸せ」でないことが大事なのであって、当たり前前の平凡な暮らし、さらさらした日常でいいのです。「幸せ」かどうかかわからないけれど、「不幸せ」ではない、星子と暮らしているとそういう感じに襲われます。

とりたてて価値があるとも思われぬ、価値なんて考えない、などと思っていると、急に「いのち」にふれたような気になる。そして、アッと思うのは、「いのち」が大切だとか、貴重だとか、何ものにも代え難いとしたりするのには、「いのち」を限定して小さく扱っているんじゃないか、というふうなことがやってきていることです。

義務と利己主義的損得と

生きものを食って生きているのは、仕方がないことだけど、正当化したり居直ったりすることはできない。どっかで「やましさ」がつかまとう。軽くしたいんだか、何かで埋め合わせしたいんだか、そのようにしてどうなるものか、よくはわからないけれど、「いのちに化す」みたいな道筋がぼーっとあって、具体的に歩こうとし、歩かねばならないと思う。

それを「内発的義務」という言葉で表そうと思うのです。シモーヌ・ド・ビュイユという若くして死んだ女性のたいへんな哲学者がいるのですが、彼女は、「世界にたった一人いるとせよ、その時義務はある」と言うのです。たった一人でも一人ではない、神の前に立っている一人であって、神に対する義務があるのだと解します。

義務は神からの呼びかけに応える応答であり、責任です。その意味で、義務はやってきたと言ってもいいと思います。僕には、骨がらみのそういう神はいません。それでも、やらなきゃいけないと思うことはいっぱいあるのです。星子を風呂に入れなきゃいけないし、会議はすっぽかせないし、授業はノルマです。星子を風呂に入れるのをすっぽかすことはなかなか考えられないけれど、すっぽかしてもいいと思うことはけっこうあるのです。稼ぐためにしなくては行けないということに照らして、休んじゃおうか、いや休めない、休もうなどと決めているのですが、しばってゆくと、結局は「食うため」に行き着いて、そのための義務だということになる。

しかし、「食う」のは生きるため、生きなくては行けないという強固な思いはないので、「生きる義務」というふうにはならない。「汝、生きるべし」という根本的要請を私たちは受け取っていないのです。だから義務というと、力をもっている人が押しつけてくるもの、それはいやだという反撥心が育つ。

義務ではなくて、損か得かと考えるほうが私たちにはなじみ深いし、身についています。自分が得をするのを利己といひます。「情けは他人のためならず」という諺は、この頃解釈が変わってきていますが、これは利己主義です。情けを人にかけて、結局は自分が得をするのだよ、という意味で、利他主義ではありません。

考えてみると、しつけはほとんど損得勘定で成り立っていることに気づきます。小学校1年の孫とプールに行き、帰りにソフトアイスが食べた



マイナスをゼロに 幻想はもう捨てよう

最首悟さんの話をはじめて聞いた。3月4日の本誌主催「プリコラージュセミナー」でである。最首さんからは35年も前、彼が東京大学の大学院にいた頃、強烈なメッセージを受けたことがある。それがこうして出会うことになったのは彼が介護家族だからである。



子の一人が重度の障害をもって生まれた。「死んでくれないかなあ、と思うんですよねえ」。満員の会場がシーンとする。でも、彼は穏やかでふつうの口調である。「そう思いながら、一生懸命やっつてこともあると思うんです」「殺そうとは思ったことはないですけど、親子心中は考えますねえ」。これ、笑顔での発言である。会場は、ああこんなこと言ってもいいんだという、逆に緊張が解けた雰囲気になる。

誤解しないように。これは40kgも体重のある我が子を70歳の介護者がおんぶしてケアする、そんなケアを30年間続けてきた彼が言うことなのだ。白内障の手術で入院したら、若い医者への練習のために反対の目のレンズまで取られて医療に希望なんかとっくになくしている彼が言うことだ。毎日風呂に入れ、それを障害者団体から「セクハラそのものだ」と糾弾されて、「もう二度としません」と約束して家に帰り、妻から「自分の子どもを風呂に入れて何が悪いのよ」と言われて入浴ケアし続ける彼の発言なのである。

「ケアしたいなんて人はいないでしょう。向こうだって、こんなヤツにケアされたくないと思っっているにちがいない」。それでもケアし続けていることの根拠を探して「内発的義務」なんて言葉をつくっていくのだ。



そんな立場から、彼はあまっちょろいボランティアなんか小気味よく批判する。本当は、当日会場の大半を占めていたわれわれプロの介護職にも言いたいことはいっぱいあったらと思う。直接の批判も皮肉もなかった。でも私には深いところで届くものがあった。それは、次のような発言に象徴される。

「マイナスをいかにゼロに近づけるかということだと思っんです。決してプラスにはならない。してはいけません」。

うーん。介護の世界のダメなところが見えてきたぞ。

「自分が入りたいと思うような老人施設をつくりたい」なんて言う人がいる。私も言っていたことがある。しかし、老人施設なんて入りたくて入るものじゃない。自分の家での個別の生活を断念せざるをえなくなって、しかたなく入るものだ。

そこで必要なのは「しかたなく来たけれど、ここでの生活も捨てたもんじゃないな」と思ってもらふようなケアだ。マイナスをゼロに近づけることだ。ところが「日本一の施設にしたい」なんて言う。



星子が居る

言葉なく語りかける重複障害の娘との20年
著者◇最首 悟
体裁◇四六判・上製・446頁
発行◇世織書房
定価◇3,600円+税

この本に対するお問い合わせは
プリコラージュブッククラブ (BBC) まで。
0120-060-614

それは競争社会の立身出世主義そのものじゃないか。「日本一」じゃなくて、日本中でどんな介護職でもできるようなふつうのケアをちゃんとやって見せることが必要なのだ。



「尊厳を守るケア」なんてのもプラスのコトバだ。呆けや寝たきりになったら人間の尊厳なんかなくなるから筋トレしましょう、なんて風潮を生み出しているだけではないか。「介護予防」もそうだ。本当に介護予防したければ、ベッドの幅をせめてシングル幅にすることに補助金を出せばいい。介護予防の10分の1の予算で10倍の効果が出るはずだ。

「家庭的ケア」なんてコトバもプラスの雰囲気をもっている。でも考えてみればいい。日本の現在の家庭は、障害児や精神障害者、寝たきり老人たちを施設に送ることで成り立っているではないか。どおりで「家庭的」を売り物にするグループホームが、ちょっと呆けがすすむと、すぐ精神病院に送り込むという排他性をもっているはずだ。

では「地域」は老いを支えられるだろうか。「地域ケア」なんてコトバもなにやらプラスの雰囲気をもっている。そんなコトバには気をつけたほうがいい。老いを支える地域なんかどこにも残っていないではないか。

今、どんな人でもできるだけ地域で支えようとしている実践は「地域と闘うケア」になっているではないか。特に、都市近郊の住宅地がもっとも差別的



ケアの社会倫理学

医療・看護・介護・教育をつなぐ
編者◇川本隆史
体裁◇四六判・並製・376頁
発行◇有斐閣
定価◇2,000円+税

だ。高学歴で権利意識のある中産階級の連中がもっとも老人施設に反対し、痴呆老人が歩くことや顔が見えることにさえ文句をつけるのだ。この先、日本中がみんなこんな状態になっていくのだろう。



「グループホーム」も「小規模多機能」も「地域ケア」で「家庭的」だからいいのだそうだ。かつて、「老人保健施設」も「地域」と「家庭」に帰すからいいと言われたものだ。「ユニットケア」も「家庭的」だからいいケアができるのだそうだ。

もうこんなプラスのコトバ=幻想に期待したりするのはやめにしようよ。期待しては幻滅させられて、今度は次の幻想を探しては……、この繰り返しではないか。その典型が「リハビリテーション」だろう。いつまでたっても現実から始めないための「未来への逃避」……。これだけ多くのコトバと制度が出てきながら、老人のベッドの幅ひとつ広がっていない。いかにこの世界が地に足をつけていないか、わかっていうものである。

やむなくやっているものとしての介護、という見方は、私たちの人生観とも通底する。やむなく生きている、生かされている、そして関わりたくないのに人と関わって生きていかざるをえないということにも。

※最首悟著『星子が居る』と今回のセミナーのテキスト『ケアの社会倫理学』に入っている「ケアの淵原」は必読。